４月２３日、私は富山県南砺市妙敬寺様の聞法会にご縁を賜り、中津駅から金沢へと出発しました。妙敬寺様の坊守、立野奈津子様とのご縁はかれこれ１８年前に遡ります。高岡超願寺様の坊守中臣みき様のお声がかりで、高岡教区坊守研修会の講師に招かれ、８０名ほどの坊守様を前にお話しをさせていただいたことがありました。そのとき参加されていた立野さんから後日お便りを頂きました。それ以後、妙敬寺様に呼ばれたり、立野さんが長仁寺の報恩講にお参り下さったり交流が続いております。この度久しぶりに、妙敬寺様の聞法会でお話をしていただきたいとのご依頼を頂きました。

　私は、最近はご法話をすることから遠のいていましたし、心身共に不調が続いていたので、ご依頼を受けたとき少し躊躇いたしました。立野さんのご期待に応えられるだろうか。まとまった話しが出来ずに迷惑をかけることになればさらに落ち込むことになりはしないか、そういう負の感情が沸いてきました。しかし、向こうからのご回向ですから、如来様がこの不調を脱するご縁をくださったのかもしれないと前向きにとらえてお引き受けすることにしました。立野さんは、大石先生と直接のご縁はありません。大石先生のお姿を拝見したいとご要望があり、大石先生がＮＨＫ番組「こころの時代」に出演されたときのＤＶＤを持参しました。また藤解照海先生のＤＶＤも合わせて持参しました。

立野さんからは「なぜ聞法しなければならないか」というテーマが与えられました。私は、大石先生の歌詞「光あり」を一番から順に追い、先生の歩みをたどらせていただこうとあらかじめ考えていました。求道の厳しさ、そして開ける世界のすばらしさをお伝えできればと講壇に立ち、最後に皆様といっしょに「光あり」を唱和させて頂きました。その後大石先生のＤＶＤを皆さんと視聴いたしました。私は久しぶりの視聴でした。先生のお若いお姿、颯爽とされていて、柔和なお顔の表情を眺めているだけで心が和まされました。

翌日は午前中から法座が始まりました。昨日お参りくださった方も続けて参って来て下さっています。新しくお参りに見えた方もあります。二日間とも２０名近いお参りでした。まず住職様の導師で勤行が勤まり、その後立野さんの提案で藤解照海先生のＤＶＤを観ることになりました。こちらも私は何度も視聴しております。「人間の知恵、仏の知恵」というタイトルです。ビデオ視聴が終わり、私は残り一時間、お話をしなければなりません。不思議に何をお話しようか、何も心に浮かばないままでした。藤解先生のお話の余韻が残っています。私はこの余韻を皆様が体で感じ取って頂きたいと思い、今の感覚は仏様の世界に触れて心が「ほどけた」状態ですよとお伝えしました。仏法は経典の言葉をたくさん憶えて理解するのではない、日頃の生活で硬くなった心をほどけさせていただく、そういうご利益がありますとお伝えさせていただきました。

さて、今日はどういうご縁になるだろうかと一瞬沈黙したあと、私の口からかつての我が家に起こった事件のことが口をついて出て参りました。中学生の娘に赤ん坊ができたときのことです。このことは、これまであちらこちらで何度もお話していますから、すでに御存知の方もおられます。私自身、またこのことを話すのかなあと戸惑う気持ちもしました。が、先に口から言葉が出て来るという感じで話がはじまりました。記憶を辿りながら、娘から妊娠を告げられたときの驚き、なんとか逃げ道が無いか迷ったこと、当惑したまま出産の日を迎えたことをお話させていただきましたが、ここでは割愛して、孫が誕生してからのことに絞って書かせて頂きます。

　娘は始めから産む決意は変わりませんでしたが、私は事実を知らされてから、とにかく何も無かったことにしたい、どうしても受け入れることはできない、母娘二人どこかに車ごとぶつけて心中したい、そんな逃げることしか考えられないのでしたが、大石先生のおっしゃる「産ませてあげなさい」という一言で、心が定まらないまま出産の日を迎えたのでした。産まれた孫の世話をしながら、どうしようもなく辛い気持ちでいたあるとき、赤ん坊を背負いながら、家の中を彷徨（さまよ）うようにフラフラしながら気づくとお内仏の前に立っていました。その時、私の心の底から恐ろしい声がしたのです。「ここだけは来たくなかった・・・」絶望感からの闇の声でした。曠劫来、如来様から逃げ続けて来た迷いの私、同時に背中の孫がそんな私をほとけさまの前に連れて来てくれたことに気づかされました。娘が孫を産んでくれて、逃げ続ける私を仏様の前に膝まつかせてくれたのです。それでも、抵抗する私、半信半疑なのでした。

　あるとき、先生は消沈している常照さんと私に対して、白隠禅師（はくいんぜんじ）の話をされました。

白隠禅師のことを尊敬している庄屋がおりました。ところが庄屋の娘がやはりまちがいをおこし子どもができてしまいました。父親から折檻（せっかん）されるのを恐れた娘はとっさに嘘を言います。「赤ん坊の父親は、父親が尊敬している白隠さんだ」と。庄屋は怒り心頭、赤ん坊を抱いて白隠さんのところへ行きます。「あんたはうちの娘になんてことをしてくれたんだ！」白隠さんはそれに対して何事もないかのように、赤ん坊を受け取り、乳母を探して育てます。娘は罪の意識で苦しくなり、本当のことを打ち明けます。父親はまた白隠さんのところへ駆けつけ、「申し訳なかった」と謝り、今度は赤ん坊を連れて帰ります。するとまた白隠さんは何事もなかったかのように赤ん坊を返しました。

私は当時、どうして先生はこの話をされるのか、よくわかりませんでした。白隠さんはやましいことが無いから、何事もなくいわれるままにできる。うちは娘の間違いですから親として恥ずかしい、みっともない。平静ではいられないのです。先生は親の気持ちがお分かりにならないのだろうか？そんな不足を感じていました。先生に口答えは出来ないので心の中で言っていました。

　それからちょうど今頃、４月か５月だったか、毎月のご法座が終わって、中津駅に先生をお送りするため、山国川に沿って車を走らせているとき、先生がおっしゃいました。「薫さん、娘さんが赤ん坊を産んだのは、春になったら蝶々が飛んできて花が咲くでしょう？それと同じことよ」

青葉若葉の景色を嬉しそうに眺めながらおっしゃる先生に、私はそんなのどかな話しじゃないのに、先生は親の心も知らずに・・・とやはり言葉には出せませんでしたが、恨めしい気持ちで聞いていました。虫や花の世界はそうかもしれないけれど、と春真っ盛りの心弾む景色の中にあって、暗く惨めな気持ちに覆われている私だったのです。

これらの話は、これまで何度かお話したことがあり、その都度、同じように語ってきたのですが、今回は違いました。お話している最中に白隠禅師が何事もなかったかのように、赤ん坊を連れて来たら受け取り、また連れに来たら言われるままに返す、その一連の白隠様のふるまいがどういう御心境から出ているのか、それが話している最中に解けたのです。障りが無い。春が来て蝶々が飛んできて花が咲く。それも天地の営みでなんの障りもなく、あるがままの世界です。

ああ、そうだ。先生は真如の世界をおっしゃっていたのだ。人間のはからいの無い仏の世界は、善悪、美醜、勝ち負け、すべての対立が消された世界。絶体界。善い悪いをいうのは人間の分別です。人間の分別が善いとか悪いとか、判断して苦しむ。本来無いものを作り出して迷い苦しむ。本当は何も無いんよ。先生のお心が２３年の歳月を経て届いて下さり、無明を破して下さったのです。

私が我執で分別するのは、自分を中心にした迷いです。迷いを迷いとはっきり知らされました。私の曠劫来の迷いに気づかせ、如来様に気づかせてくれた娘や孫に、心の底からお礼の気持ちが沸いてきます。当時暗く沈んでいる私に先生がおっしゃってくださった白隠禅師のことや、春になったら花が咲く、そこへ蝶々が飛んで来る。そういう現象の底にある実相の世界に目を向けさせるこの上ないご縁をつくってくれました。機縁熟し、ようやく私の心の中に花が咲いて下さいました。

この度のご縁を作って下さった立野奈津子さん、お参り下さった皆様にも感謝です。大石先生と藤解先生のＤＶＤを視聴させていただいたことも大きなご縁となりました。藤解先生がＤＶＤの中でおっしゃっています。「真如一実の功徳大宝海」。真如一実の功徳でないものはありません。その中にあって、迷い苦しんでいた私です。円満な満ち足りた世界、何も言うことの無い世界です。

　立野さんから今回のご法座について、「なぜ聞法しなければならないのか」というテーマで話して欲しいとご依頼を受けていました。私は家庭内の事件や不和、思うようにならない人生に苦悩する中で、浄土真宗の教えにご縁を頂きました。本願、浄土、信心、念仏、これらのお言葉について、何年も聞法を続けて参りました。仏教用語は大体お聞きし、自分も使い書くようにもなりました。しかし、先生がいつも強調された「帰命」の関門を通らなければ、それらの言葉は単なる知識で生きた教えにならない。そういうもどかしさがありながらどうすることも出来ずにきました。４月は私の誕生月です。古希を迎えました。気候の良いときにこの世に産んでくださった両親にまず御礼です。そして先生、家族、これまで共に聞法を続けて来て下さった法友の皆様に御礼です。古希というのは、「古来、希（まれ）なり」といわれるように、これまで生かされてきたのは当たり前でない。たくさんのいのちを頂いて生かされてきました。「ただ食い動き眠るだけなら、鳥や獣と変わりない」だから、生かされているこの身、許されて生かされています。御恩報謝の生活がはじまります。

　１２日は、小学校の同窓会に初めて参加させて頂きました。６０年ぶりに遇うかつての同級生たち。４８名のうち１８名の参加でした。幼いころの面影がそのままで懐かしく、６０年間のブランクも感じませんでした。九州から来たというので皆歓迎してくれました。当時の私になっている自分に驚きながら、うれしさに包まれました。昨年アメリカ旅行から戻ってから、常照さんと対立することが多くなり、膝の故障も加わって体力気力両面で不調が続いていました。そんな私に同窓会のみんなとの久しぶりの再会は元気を取り戻させてくださいました。人数も少なく、机を並べて共に学び遊んだ男子も女子も、皆兄弟姉妹のよう。言葉にならない励ましを受けました。

　４月は寺報をお休みしました。自分でもどうなるのだろうと心配になるほど心が動揺していました。周りの人にも迷惑をかけました。帰命の前の陣痛だったのだと今は思わされています。先生からお聞きしていたことがあります。臼（うす）の中をクルクル落ちて行く感覚。止めようとしても止まれない。落ちて行くのです。落ちきったらあとは浮かびます・・・。体験された方でないと教えられない数々の教えを聞かせて頂きました。

　歩みつづけた「この道一つ」

　心の闇路を　幾十年（いくととせ）

　師仏の教え　なかりせば

　なんで往けよう光明土

　　　　　　大石法夫先生作詞「光あり」３番

なむあみだぶつ　　　　　　　　　　　　　　　　法喜